

私の「家の記憶」は、本郷区（現・文京区）西片町十番地の三軒の家からはじまる。西片町十番地はかつての備後福山藩主・阿部家の広大な屋敷跡を分割したため、その名残で、「い」から「と」までに分けられ、さらに、いの何号、ろの何号……という番地がつけられている。

私は、生まれてから高校卒業までに、「にノ四十号」（だつたと思う。記憶ちがいかもしれない）、「いノ十六号」、「ろノ五号」、三軒の家に数年ずつ住んだ。「にノ四十号」は借家、「いノ十六号」は信綱の家、「ろノ五号」は父・治綱名義の家。それぞれの事情を言えば長くなる。

まあ、戦前、戦中、戦後、わが家にも、社会全体にも、いろいろな事情があつた。そんな時代に私は二十歳までの幼少青年時代を過ごしたのだつた。

「にノ四十号」時代に、千葉県布佐市（現）に二間の部屋を借りて疎開した。父母と小学一年生の小生。戦時から終戦までのちょうど一年間である。利根川に近い斎藤さんという造り酒屋のお宅の離れだった。私たち一家の隣の部屋に、新婚のまだ若い陸軍中尉が間借りしていて、従者付きだったのにびっくりしたのをおぼえている。当番の下士官が、朝から晩まで一人付くのである。

まだ、酒造りには、直径二メートルほどの木製の大樽を使用している時代で、田圃に沿つて何十もの大樽が日に乾させていた光景を今でも思い出すことができる。この布佐市で、私は国民小学校一年生になる。

子供時代の私が、晩年の横山大觀を何度か見た、とうエピソードを仄聞した読者もおりだろう。第二の「いの十六号」の家が、横山邸の三軒隣だったのだ。昭和二十年代前半、私が小学生時代の話である。

信綱は熱海に引っ越し、空いた家に信綱の息子や娘、孫たち五家族が、一部屋か二部屋ずつに住んだ。台所、風呂、手洗い等は共用だった。戦災で家が焼かれた者が引き揚げてきた者、わが家は「ろノ五号」に家を持ちながら、行き場所のない前居住者が住み続けていた、と聞いている。戦後の住宅難時代の縮図である。

短歌の現在 No.440 「家」のこと2 佐佐木幸綱

「ろノ五号」の家は、細い路地の奥だった。その「ろノ五号」時代から、「心の花」の編集・歌会をわが家でやるようになつた。備後藩主・阿部家の別荘を移築したとかで、どーんと太い大黒柱があり、三十センチもある檁の梁があつたり、堅固で立派な木造の家だったが、何しろ古い家だった。百年以上たつていたのだと思う。檁は堅い。釘を打ち込んでもまったく受け付けなかつた。

昭和二十年代終わりだった。それまで角利一さん方で行つていた「心の花」の編集を父治綱・母由幾を中心に行つた。安藤寛、栗原潔子、遠山光栄さんら六、七人が毎月、「ろノ五号」の家にみえた。歌会の参加者は、そう、十五、六人だつただろうか。いまの「東京歌会」の原型はこの時代なのだと思う。当時「フジ」という名のシェパードが家の中にいて、歌会